

共生思想に基づくグレースペースに関する研究

一日中の伝統庭園を対象として

建設工学専攻
住環境計画研究

ME17051 しゅう せい
周 晟
指導教員 清水郁郎

1. はじめに

建築は、社会、経済、文化、技術の発展に伴って、今日まで発展してきた。しかし、概して居住や商業等に関する機能性だけが重視されたため、建築は機械的産物となってしまった感がある。また、グローバル化により伝統観念も揺らいでおり、地球温暖化や都市化の進展とともに、居住環境を取り巻く情勢は益々複雑化している。

現代において、建築は高度化しているが、建築物をめぐる精神性や文化的価値は見落とされてしまい、空間の意味もその重要性を無視される場合が多くなってしまった。そのため、人間と自然がいかに共生できるかという疑問は棚上げされたままである。グローバル化において独自の建築文化も世界に開かれるが、そこで自己価値を実現するためにも、人間と自然との共生は真剣に考える必要がある。

本論は、建築家黒川紀章による共生思想、グレースペースの概念を使って、日中の伝統庭園の比較研究を行い、両者において人間、自然、建築の間関係がどのようなものであるのか、さらに両者のあいだでどのような違いがあるのかを、中国蘇州の拙政園、獅子林と京都の桂離宮、龍安寺を対象として、検討するものである。

2. 建築の共生思想

現代建築は多様化する傾向があり、また、技術性、個性、利便性が総じて追求される一方で、空間を構築する意図やその具象化という建築の本質は深く掘り下げられていない。本研究では、伝統的な思考を現代の技術や思想と実際に結びつけられれば、柔軟に適用できると仮定する。それらは異質なものの融合と認められる。この点について、黒川紀章は、茶道をめぐる思想的側面や日本の伝統文化から、「異文化の共生」、「人間と技術の共生」、「人間と自然の共生」、「空間の間の共生」を中心とする共生思想を生み出した。黒川の提唱した建築の共生思想は、より微細には以下の四つの視点にまとめられる。

- (1) 部分と全体には、同じ価値がある。
- (2) 内部空間の外部化および外部空間の内部化が起こる。自然と建築の間様々な制限領域を乗り越え、新たな空間・曖昧な空間を構築することができる。

(3) 共生的な要素を重視し、異質のものを混合するという意識を持つ。特に伝統文化や精神と現代技術の融合を強調する。

(4) 自然、人間、建築の関係を重視する。材料、インテリア等は人間の精神、感覚を表現できるかどうか、自然環境に破壊性があるかどうかを考える。

実は、日本でも中国でも、伝統的な庭園は異質な文化にもかかわらず、人類と自然、人類と文化、人間の自由と個性、様々な構築方法を通して、共生の理念および豊かな文化性、社会性を表現しうる。

3. グレースペース

そのために重要なのがグレースペースである。グレースペースは室内と室外の間の過渡空間であり、室内外の空間を融合し、空間を緩やかにつなぐ中間領域と認められる。光線の変化に応じた空間を色に喩えれば、室内が「黒」で、室外が「白」となる。グレーは中間的な性質を持ち、いずれの色



Figure 1 グレースペース見取り図

とも調和して存在できる。このような空間は、建築物の内外の境界を曖昧にし、空間を一体化させる。

たとえば、現地調査により、縁側、東屋、廊下のようなよく見られる構成要素に加えて、石舫、漏れ窓、更に建物自体もグレースペースの構成要素になることがわかる。それらは、主に、「点」型、「線」型、「付着」型の三種に分けられる。

① 「点」型グレースペース

この型のグレースペースは独立建築物の室内外空間の浸透、融合の両方を体現する。蘇州庭園の場合は東屋や榭が、京都の場合は茶室等が代表である。

② 「線」型グレースペース

この型のグレースペースは外から内までの組み合わせを強調し、建築物の間の接続が最も大きな特徴となる。蘇州庭園の場合は廊下の接続がそれに該当し、京都の場合も同様に渡り廊下、回廊が該当する。

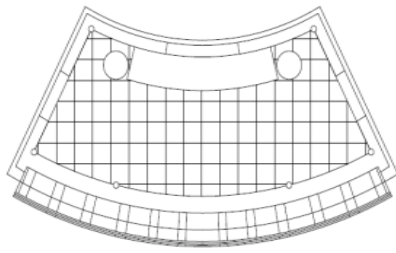


Figure 2 「点」型の例：拙政園の与誰同坐亭

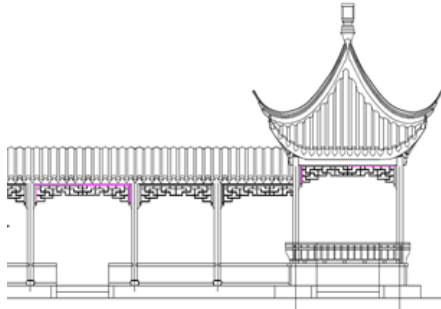


Figure 3 「線」型の例：獅子林の廊下

③ 「付着」型グレースペース

この型のグレースペースは様々な機能があり、空間の内容と形式がさらに豊かである。独立して建築の部材あるいは庭園の景として存在し、外と内の連接機能を担うが、全体から見れば建築物と周囲の環境の境界の機能を担う。例えば、蘇州庭園の漏れ窓、京都の縁側がそれに該当する。

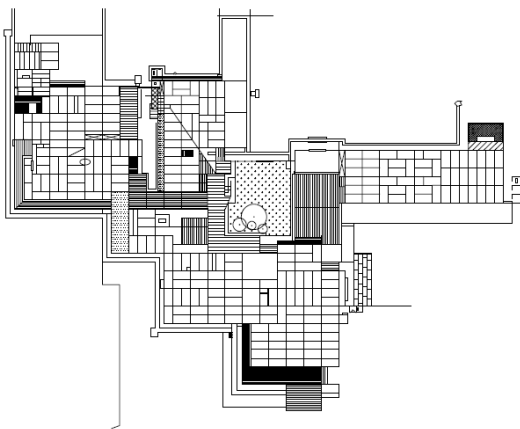


Figure 4 「付着」型の例：桂離宮南部書院の縁側

4. 日中庭園の比較

日中庭園の発展過程には、民族文化、伝統、経済、政治など様々な内容を発見することができる。日中の伝統庭園は空間感の重視、自然と繋がるグレースペースの運用が多いなど様々な共通点がある。

日本の伝統庭園は茶室から大きな影響を受けて、「わび」と「さび」という観念を簡素な形式で表現し、禅宗の影響を加えて人間の心境を描写し、また、水を中心として、自然景色を再現した演出が見られる。これを「見立て」といい、静的な美しさを味わ

う技法となる。枯山水の庭園がその端的な例である。貴族の贅沢と異なり、禅宗僧侶は和敬静寂の境地を追求した。龍安寺方丈庭園は最も代表的な枯山水の庭園であり、白砂が水を象徴し、異なる形、大きさの石が様々な小島や山を象徴する。古人は、この抽象的な表現手法を通して、山水の関係を想像した。また、庭園の周囲には植物をめぐらせ、虚実とり混ぜて自然に調和するように計画された。

一方、日本の伝統庭園では、建築物の割合が比較的低いにもかかわらず、ものの哀れという美意識及び価値観を山水、石、木に加えて建物でも表現する。すべての空間構成要素は等価となり、廊下、窓、縁側などグレースペースの運用も豊かだ。

中国の伝統庭園は主に道教「天人合一」の影響を受けて、自然の境界を追求し、人間の建物が自然から生まれるという理念の表現が最終の目的であった。封建制度のため、庭園は一般的に閉鎖空間となり、面積も小さい。そのため、曲がりの路地と自由な建築という配置を採用して空間の制限性を乗り越える。さらに、「借景」の手法や多数のグレースペースを運用し、動的な美しさを構築し、各角度から見れば異なる景色を味わえるように計画される。また、建築物の割合が高いので、東屋、庭などを十分に利用し、グレースペースや中間領域を増加させる。したがって、中国の庭園は築山を中心として、人工的な障壁を設置し、空間感を強めることになる。

5. おわりに

グレースペースの比較から、日中庭園では様々な共通点と相違点があることがわかった。また、両者には、文化性、社会性、地域性などの様々な特徴を発見することもできた。同時に、今回の研究を通じて、伝統建築をめぐる美意識、文化伝承、巧妙な空間作法を多く発見することができた。

参考文献

- (1) 黒川紀章『共生の思想 増補改訂』、徳間書店、1991
- (2) 黒川紀章『グレーの文化』、創世紀、1977
- (3) 劉敦楨『蘇州古典園林』、中国建築工業出版社、2005
- (4) 彭一剛『中国古典園林分析』、中国建築工業出版社、1986
- (5) 汪菊淵『中国古代園林史(上下巻)(第2版)』、中国建築工業出版社、2012
- (6) 千宗屋『もしも利休があなたを招いたら――茶の湯に学ぶ”逆説”のもてなし』、角川書店、2011
- (7) 柘野俊明『共生のデザイン 禅の発想が表現をひらく』、フィルムアート社、2011